

## 横山ゆずり作 「夏を制する者は」

(授業中)

先生 (FI)…というわけで、こういう場合は必ずこの熟語を使います。これは入試の書き換え問題で、非常によく出ますから、しっかり覚えておいてください。それでは。

(効果音) (終業のチャイム)

先生 では今日はここまでにします。

(効果音) (イスの動く音。ガヤ)

大塚安志 今井、おい今井、終わったぞ。いつまで寝てんだよ。

今井洋一 (大あくび) 今日はよく寝たなあ。

大塚 なんだよお前、「今日は」じゃなくて「今日も」だろ。ここ 4、5 日間、一つも授業中眠りこけてんじゃないか。このクソ暑い中を、それも高い受講料払って、わざわざ予備校の夏期講習に来てるってのに、もったいないじゃん。

今井 なんだか最近、勉強するのがえらくカッたるくてな。あーあ、こんなことなら夏期講習なんて取るんじゃなかったよ。

大塚 何言ってんだよ。「ここに来よう」って先に言ったの、今井、お前だけ。それも「一番いいクラスを取りたいから」って、申し込みの順番取るために、徹夜までして並んだんじゃないか。あん時の意気込みはどこ行っちゃったんだよ。

今井 あん時はあん時、今は今だよ。大体受験勉強なんて、ただの詰め込みでさ、最近つくづくイヤになってきたんだよな。

ナレーション 今井洋一は、高校 3 年。来年の受験を控えて、現在、灰色の受験生。夏休みも返上して、友人の大塚安志と一緒に、ある有名予備校の講習会に通うのでした。

大塚 まあ、今はつらいけどな。でも今井、来年学校に入っちゃえば、もうバラ色だぜ！うちの兄貴が今、青春大学の 2 年なんだけどさ、大学生ほどラクな商売ないってさ。授業なんか、みんな代返で、麻雀はできるし、かわいい女の子はたくさんいるし、目一杯遊べるぜ。とにかく、入っちゃえばさ。

今井 そんなもんかな。

(音楽) (今井、自分の部屋で聴いている。)

(効果音) (階段をトントン上がる音)

今井の母 洋一。

今井 …。(音楽で聞こえない)

(効果音) (ドアをバタンと開ける)

母 洋一！

今井 なんだよ。

母 さっきから、ずっと音楽ばかり聴いてるじゃないの。講習会で勉強してきて、疲れてるだろうと思って、今まで黙っていたけど、いい加減にしろさい！

今井 うるさいなあ。大丈夫だよ。

母 有名な予備校に言ってれば大丈夫ってわけじゃないでしょ。特に夏は“勝負時”なんだから。今日だって、お向かいの奥さんに言われちゃったのよ。「お宅の洋一さんはよくお出来になるから、国立でしょ」ってね。あなたが受験に失敗したら、お母さんまで、ご近所に合わす顔なくなるんですからね。

今井 母さんには関係ないだろ。邪魔だから出てってくれよ！

今井(モノローグ) 受験するのはおれなんだから、受かろうと落ちようとおれの勝手だろ。それに、国立だけが大学じゃあるまいし。大塚は、大学なんて入っちゃえばこっちのもんだみたいに言ってたけど、遊ぶために大学に入るなんて、バカバカしいよな。そのためにあくせく勉強するなんて、それも、あんな、勉強に出る所だけを詰め込む勉強なんて、ほんと意味ないよ。何が“夏は勝負時”だ。結局“他人を蹴落とせ”ってことじゃないか。

ナレーション いったいなんのために受験なんかするのか、いい大学に入ってなんになるのか、すっきりしない気持ちのまま、照りつける日差しの中、予備校に通い続ける今井洋一でしたが、ある日の帰り道――。

青山<sup>まとし</sup>聡司 おう！ 今井じゃないか。お前もこの予備校の夏期講習か？

今井 あ、青山先輩。どうしたんですか？ 確か先輩は西部大学に受かったんじゃ。

青山 うん、まあな。でもほかに行きたい大学があつてさ、浪人してるんだ。今井はどこのクラスなんだ？

今井 …一応、午前部の国公立理系クラスに…。

青山 へえ、すごいなあ。そのクラス、人気あるんだろ？

今井 はい。だから友達と徹夜して並んで、やっと入れたんです。

青山 大したもんだな。やる気十分じゃないか。その様子なら、ストレートでいいとこ行くよ。

今井 いや、先輩、おれ、ダメなんですよ。

青山 「ダメ」って、何がさ？

今井 もう、受験勉強なんて、やる気しないんですよ。あんな…。

青山 ま、この暑い中で立ち話もなんだから、涼しいところに行こう。おれでよけりゃ話してみろよ。

(効果音)(音楽) (喫茶店)

青山 どうしたんだ、今井？ なんで受験勉強がイヤになっちゃったんだ？

今井 だって先輩。先輩は平気なんですか？ ただ丸暗記すればいい、みたいな勉強して、ライバルに差をつけることばかり考えて、それで大学に入っちゃえば

もういい、そんな考えで受験するなんて、おれ、「くだらない、バカバカしい」と思うんです。おふくろはおふくろで、「とにかくいい大学に入れ」って世間体ばかり気にしてるし。おれ、もっと意味のあることがしたいんです。

青山 うん、お前の言うことはもっともだよな。おれだって、まあ勉強が大好きってわけじゃないからな。でもな、今井、お前が受験勉強がイヤになった理由は、本当にそれだけか？ “勉強サボりたい”とか、“怠けたい”っていう気持ちは全然ないのか？

今井 え？（憤慨気味に）先輩。

青山 いや、浪人しているおれがこんなこと言う資格ないかもしれないけどさ、確かに、入試のための勉強なんて、細かい年号を丸覚えしたり、バカバカしいと思うこともあるさ。だけどな、そんなバカバカしいこともできないで逃げ出したら、それこそ本当につまらない人間になっちゃうぜ。（間）おれはさ、大学にいる4年間の中で、本当に自分にふさわしい、自分に与えられたものはなんなのかってことを、探したいんだ。おれ今、教会に行ってるんだけどさ、まだクリスチャンってわけじゃないんだけど、でも、いろんな話聞いてると、「なるほど」と思うことあるんだよな。例えばさ、おれたちの学力とか才能とか、そういうのは全部神様が与えてくださった。だからその能力を最大限生かす努力をしなくちゃいけない。…なんとなく分かる気がしないか？

今井 宗教のことは、おれよく分かんないから…。それに、先輩はおれなんかと頭の出来が違うし。

青山 何言ってるんだ。おれの言いたいのはさ、せつかく自分に与えられているんだから、それぞれが精一杯やるべきじゃないかってことさ。受験にしても何にしてもな。

今井 …。

ナレーション 「自分は今の、現代の受験体制に妥協したくないんだ。先輩が言うような、なまけ心から勉強がイヤになったんじゃない。」今井洋一は、半ば自分自身に言い聞かせるように、心の中でつぶやくのでした。ところが、数日たったある日――。

（効果音） （ドアの開く音）

今井 ただいま。

母 （おろおろ慌てて）あ、洋一、遅かったじゃない。大変なのよお。

今井 どうしたの、そんなに慌てて？

母 たった今、お父さんの会社から電話があつてね。お父さんが、お父さんが急に倒れたって。

今井 え?! それでおやじの具合はどうなの？

母 病院に運ばれたらしいんだけど、詳しいことはまだ分からないのよ。とにかくお

母さん、今から行ってきますからね。洋一、うちのほう頼んだわよ。

(音楽) (ブリッジ。不安そうな音楽)

今井 母さん、おやじどうだった？

母 まだなんとも。心臓に相当負担がかかってたらしいわ。命にどうこうってことはないんだけど、無理は絶対にダメらしいし、会社のほうもどうなるんだろうねえ。…洋一、もしかしたら、洋一にも家を助けてもらうことになるかもしれないから、考えといてちょうだいね。

今井 え、それじゃ、おれ大学へ行かしてもらえないの？

母 それはね、また「大学あきらめろ」とは言わないけどね、父さんの具合によっちゃ、のんびり4年間遊んでてもらわうわけにはねえ。ちょっと無理かもしれないわねえ、悪いけど。

(音楽) (沈んだ感じ)

今井(モノローグ) (エコー) 大学に行けないかもしれない。それじゃ、おれは今まで何のために勉強してきたんだ?! 無理やり頭に単語や公式詰め込んだのは、全部無駄になってしまうのか?! クソ! なんなんだよ。おれはついこの前まで、受験なんて無意味だと思ってた。それなら、受験できなくなって、ちょうどいいじゃないか。…でも、でもおれ、やっぱり大学へ行きたいんだ。ただ、今までは勉強がイヤで、逃げるための口実を探してただけなんだ。先輩の言った通りじゃないのか? けどおれ、今までやってきたこと、無駄にしたくない。いざとなれば、学費はバイトしてなんとかできる! 大学に入って自分の力を確かめてやる! そうだ、この前青山先輩は、「与えられた能力を精いっぱい生かす」って言ってたけど、おれだって、あとで悔やむのはごめんだ。やってみよう! 先輩なら何かアドバイスしてくれるかもしれない。えっと、青山先輩の電話番号は、と。

(効果音) (電話ダイヤル音)

<完>